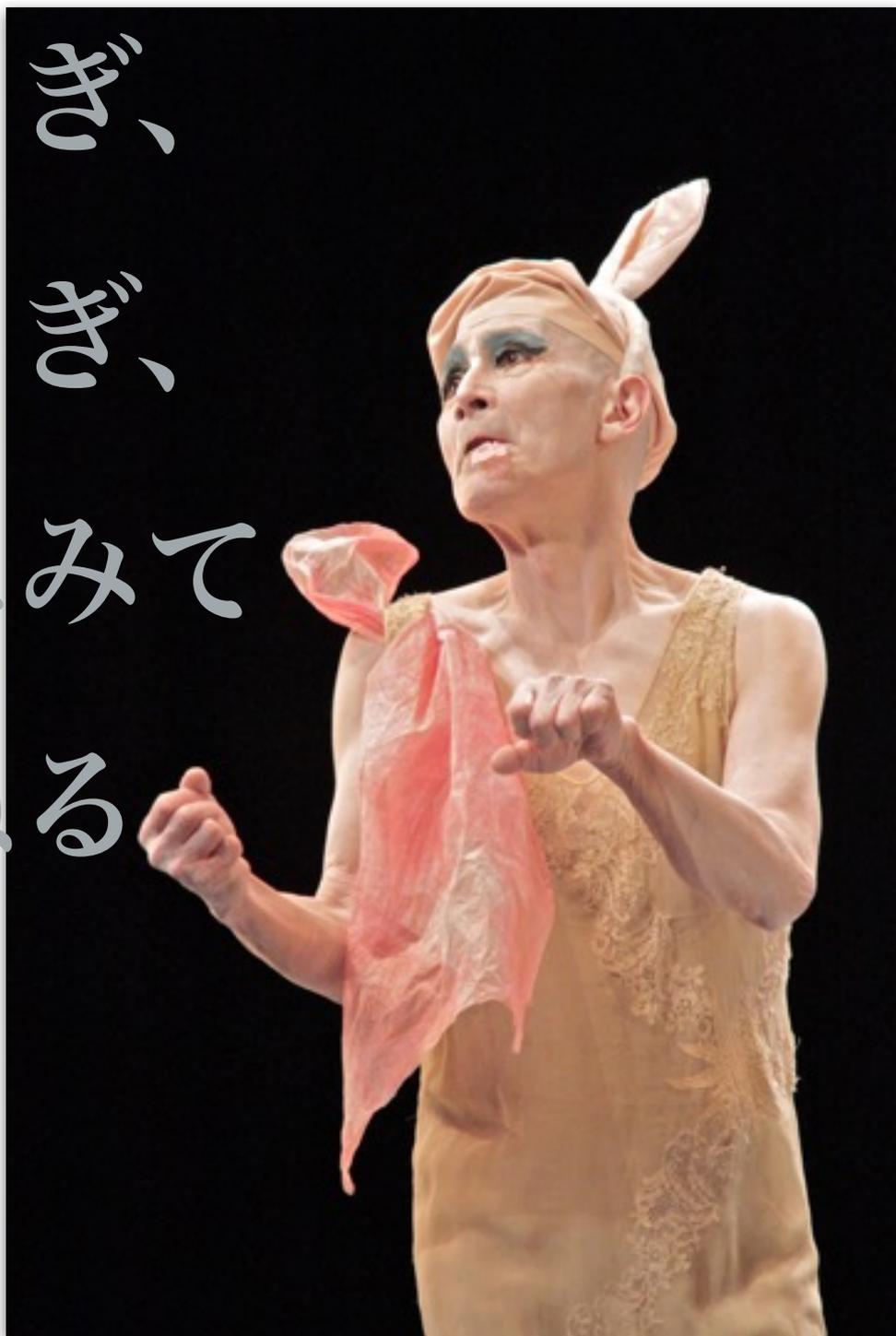


うさぎ、
うさぎ、
なにみて
はねる



大野慶人レクチャーデモンストレーション

土方巽、大野一雄と共に生きてきたものとして、今、踊るということ。

日時：2017年1月22日（日）13：30開演（開場は15分前）

場所：鳥取大学地域学部附属芸術文化センター・アートプラザ

入場無料（席数の都合上ご予約をお願いします）

主催：大野慶人レクチャーデモンストレーション実行委員会

後援：鳥取大学地域学部附属芸術文化センター

協力：有限会社かんた、NPO法人ダンスアーカイヴ構想、NPO法人舞踏創造資源

ご予約・お問い合わせ：芸術文化センター木野研究室 0857-31-5130/saiko@rs.tottori-u.ac.jp

大野慶人略歴

1938年、大野一雄の次男として東京に生まれる。1959年、土方巽による舞踏の最初の作品「禁色」に出演。以後60年代の多くの土方作品に参加。1969年自身のソロ公演を機に舞台活動を退く。1985年大野一雄「死海」でカムバック。現在大野一雄舞踏研究所所長。世界各国で公演、ワークショップを行う。近作に「花と鳥」(2013)、レクチャー・パフォーマンス「それはこのようなことだった」(2016)。著書に「大野一雄 魂の糧」(フィルムアート社)、「舞踏という生き方」(有限会社かんだ)。

舞踏とは

1960年代に土方巽、大野一雄を中心として”日本人の身体性”にこだわった作品が多数作られました。土方は「命がけて突っ立った死体」という彼の言葉の通り、“死”や”社会の闇”を突きつけ、それまでの西欧的な舞踊価値観を打ち崩す大きな社会現象を起こしました。現代美術(ハイレッドセンター他)、文学(澁澤龍彦、三島由紀夫他)、映画(長野千秋他)、写真(細江英公他)など多様なジャンルの芸術家がこの流れに巻き込まれ、その相乗効果により日本の芸術は花開いていきました。また、世界中の舞踊家が舞踏の影響を受けており、現在でも日本のコンテンポラリーダンス＝舞踏と捉えられることが多いのが現状です。その思想、手法は舞踏家により異なり、多様性を持ちながら進化してきたことも特色の一つです。

レクチャーデモンストレーションとは

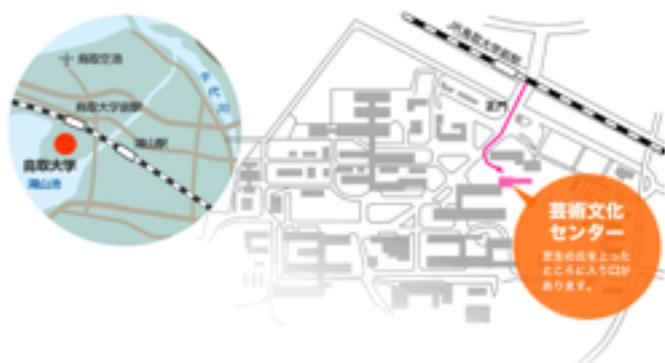
大野慶人さんは舞踏の創始者土方巽の初期の作品に参加、舞踏発生のころを知る数少ない証言者であるとともに、父大野一雄とともに踊り、彼を見守り続けてきました。父とともに見てきたものとは何か。そしてその後を継いで、精神的に活動を続ける今だからこそ、若い世代へ伝えたいこととは何か。今回は講演だけではなく、映像上映や踊りを実際に見ることを通じて、舞踏について多角的に学ぶ機会としました。舞踏について知らない方も大歓迎です。奥深い舞台芸術の世界に足を踏み入れてみましょう。

第1部「舞踏」の代表的な作品を映像で振り返る

細江英公が1960年に発表した「へそと原爆」は土方巽主演、大野慶人助演の実験映画です。舞踏がいかに他ジャンルと関わり広まっていったかを示す貴重な資料です。他に土方巽「瘡瘡譚」の抜粋、大野一雄「ラ・アルヘンチーナ頌」を合わせて見ながら60年代、70年代に舞踏を中心として何が起こっていたかをお話させていただきます。

第2部大野慶人が踊る舞踏の今

正式な舞台公演ではありませんが、実際に踊っていただき、その踊りの背景についてもお話させていただきます。写真の「うさぎのダンス」も上演予定です。なお、鳥取大学地域学部附属芸術文化センター学生が大野慶人氏との授業を通じて制作した作品も合わせて上演し、舞踏家としての大野慶人とそれを伝え広めようと生きる大野慶人の両側面を明らかにします。



鳥取大学地域学部附属芸術文化センター
アートプラザ

HP: <http://www.tottori-artcenter.com> JR
山陰本線「鳥取大学前」駅より徒歩3分

お問い合わせ、お申し込み:芸術文化センター木野研究室(舞踊・身体表現)

0857-31-5130/saiko@rs.tottori-u.ac.jp